Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語授受表現の歴史語用論的研究 ： 策動表現における敬語との相互関係
Author(s)	森, 勇太
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59389
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【27】

氏　　名	森（もり）　勇（ゆう）　太（た）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２５３３５　号
学位授与年月日	平成24年３月22日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**日本語授受表現の歴史語用論的研究** **― 策動表現における敬語との相互関係 ―**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　金水　　敏 （副査） 教　授　岡島　昭浩　　関西大学教授　日高　水穂

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、策動という、世界を言葉に一致させようとする発話行為を通して、日本語における授受表現の歴史を明らかにしようとした研究である。

「はじめに」「凡例」「目次」に続き、第１部「授受表現・敬語の構造と歴史―策動表現の運用史のために―」には、第１章「策動表現の歴史語用論的研究の構想」、第２章「敬語と授受表現の構造」、第３章「授与動詞「くれる」の視点制約の成立―敬語との対照から―」、第４章「補助動詞「てくる」の成立―動作の方向性を表す用法の成立をめぐって―」が含まれる。続く第２部「聞き手にもとめる―行為指示表現の運用史―」には、第５章「行為指示表現の歴史的変遷―尊敬語と受益表現の相互関係の観点から―」、第６章「行為指示表現の地理的変種―方言における尊敬語と受益表現の運用―」、第７章「命令形式の三項対立の形成―受益者による運用の成立―」が含まれる。第３部「話し手が行う―行為拘束表現の運用史―」には、第８章「申し出表現の歴史的変遷―謙譲語と余駅表現の相互関係の観点から―」、第９章「謙譲語の機能の歴史―オ型謙譲語の変化に着目して―」、第10章「前置き表現の歴史的変遷―「させていただく」の運用史として―」が含まれる。最後の第４部「敬語と受益表現の記述―相互関係の総合的記述―」には、第11章「授受表現・敬語の運用と語用論的制約―敬語運用の社会言語学的記述―」が置かれている。さらに、「結語」「初出一覧」「資料」「参考文献」を最後に置く。A4判239頁、400字詰め換算で約970枚に相当する。

第１部では、本論文で取り扱う策動表現の枠組みを示す。また、語用論的研究を行うために各時代の体系や形式の把握が必要であることを述べ、日本語の敬語や授受表現の構造や特徴に触れる。その上で、授受表現の歴史を確認する。第２部と第３部では、“機能と形式の対応付け（function-to-form-mapping）”のアプローチを採り、特定の言語行動（発話機能）でどのような授受表現・敬語形式が用いられてきたか、その歴史を観察する。このうち第２部では、話し手が聞き手に対してあることを行うことを求める表現である行為指示表現を取り上げ、その運用から日本語の授受表現や敬語の用法を観察する。第３部では、話し手が聞き手に対して自らある行為を行うことを告げる行為拘束表現、具体的には申し出表現・前置き表現を取り上げ、その運用から日本語の授受表現や敬語の運用を考察する。第４部では、ここまでに確認した授受表現の考察をもとに、日本語の授受表現の歴史について考察を行う。

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文の特色は、従来、特定の形式の意味変化・機能変化に留まりがちだった国語史研究の枠を越え、機能を固定して形式の変遷を記述する観点を取り入れ、その相互の往還を計ることにより、本格的な歴史語用論の体系的研究を打ち建てた点に求めることができよう。細やかな調査を積み重ねた結果として、218頁の図にまとめられるような、日本語における授受表現の変遷をダイナミックに描き出す力量は高く評価できる。ここで「この「くれる」の存在は語彙論的な特徴づけとしてのみではなく、被影響者（受益者）に関わる文法に波及的な影響をもたらしたという点でも影響が大きかったといえる。」（217頁）としているように、日本語の授受動詞体系で特筆すべきこととして「くれる」の成立を重視している。この説は大変魅力的であり、その妥当性について今後さらに慎重に検討されていかなければならないにしても、言語変化の動機付けに関する明示的な仮説が提案されたことの意義は大きい。

また、文献調査に留まらず、本格的なフィールドワークに基づく地理的変異の分析が加味された点も画期的と言える。文献調査と方言調査が、互いを相対化しながら、より総合的な言語史研究へと収斂していくという新しい研究スタイルが示された点はまことに新しい。

しかしながら、その方言調査について精査してみると、調査方法や記述に関する一貫性が十分担保し切れていない面も指摘でき、課題が残る。文献調査についても、西日本方言を反映する資料と東日本方言を反映する資料が一連に扱われるなど、やや配慮を欠いた扱いが見える。記述的な面では、授受表現の受益的な側面が強調されたために、動作主探索など、視点制約がもたらす談話的な側面との関連が見えにくくなっている点も残念である。

以上のような瑕疵は存在するものの、査読付き雑誌論文 4 編の内容を含むかなり大部な研究を理論面、記述面の両面において破綻なくまとめ上げた点は十分評価に値するものと言える。

なお、2012 年 2 月 6 日に本論文の公開の口頭試問を行い、最終試験を終えた。この点もふまえ、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。